

15 『彌性園方函』の日本医書引用についての研究

三鬼 丈知

大谷大学 非常勤講師

『彌性園方函』は、河内国八尾東郷村田中家の元允(1728-1796)、元緝(1767-1825)、元資(1800-1855)三代の医学研究の成果を記した処方集である。田中家は元允の代に農から医への転換を行い、つぎの元緝の代には医業に専従するようになった。元緝は木村兼葭堂や尾藤二洲ら文化人とも交流を持ち、医学は和田東郭と伊良子光顕について学んだという。田中家は膨大な蔵書を有したが、元緝のころに医学書のより一層の充実が図られたものとみられる。田中家には『活人録(内題『彌性園蔵書目録』)』という蔵書目録も残されている。この豊富な蔵書をもとにした研究の成果が、『彌性園方函』としてまとめられ、元資の筆によって記されたのである。

『彌性園方函』はイロハ順に処方を掲載し、その処方が適応する様々な病症や医学理論、薬物の加減などを記していくのだが、それぞれの説に出典を明記するところに特徴がある。ただし、引用書の中には蔵書に含まれないものもあり、孫引きによるものと考えられるが特定が困難であった。発表者は、『彌性園方函』が引用する『傷寒論』は多紀元簡『傷寒論輯義』に拠っていることを突き止め、日本医史学会関西支部2017年秋季学術集会において報告した。この発見によって孫引きされた中国医書を特定する大きな手がかりが得られた。多紀氏の著書は『彌性園方函』以上に多数の中国医書を引用するので、『彌性園方函』との対応箇所を確認すれば、『彌性園方函』の引用が孫引きかどうか特定しやすくなる。

『彌性園方函』には日本の医書も多く引用されているが、山中浩之の研究によれば、その引用の内35%は彌性園に所蔵されていない書の引用だという(山中浩之「在村医の形成と蔵書」、横田冬彦編『読書と読者』平凡社、2015年所収)。これらの引用の実態も明らかにしたいが、上述の多紀氏著書と比較する方法は使えない。山中は『方輿輓』や『方苑』など使用された書からの孫引きの可能性は否定できない。」と述べている。『方輿輓』は有持桂里、『方苑』は水走嘉言が著した処方集である。この両者は元緝とほぼ同世代の人である。また、『方苑』はイロハ順に処方を配置する体裁が『彌性園方函』と共通する。有持桂里は、元緝の師の一人である和田東郭の影響を大きく受け、彌性園と思想的に通じるところがあると考えられる。これらの人に相互に交流は無かったか、『彌性園方函』の引用はどうなっているのか、まずこの二名から調査を開始した。

水走平岡(1753-1815)名は嘉言、嘉玄。字、章孟。通称、飛驒守。平岡と号した。嘉言の名は水走家系譜には見えないが、同家譜において忠良という人物が飛驒守に任ぜられているため、この人に当たると考えられている。忠良は河内国茨田郡大窪の中島祖右衛門の嫡男として生まれ、1802年水走忠堅の養子となった。水走家の務める枚岡神社社務職を相続したが、1811年に養子正忠にこれを譲る。この年に『方苑』が刊行されている。その他に『何筆談』、『四診脈学』などの著書がある。『彌性園方函』で「平岡氏」として引かれるのがこの人物だと考えられるが、『方苑』他の著書の中には引用される記述を見出すことができなかった。『活人録』にもこれらの著書は見えない。

有持桂里(1758-1835)名は希藻。字、文磯。通称、常安。号は桂里また毓春園。『方輿輓』の他にも『脈候提綱』などの著書がある。『活人録』には『方輿輓』が収録されている。『彌性園方函』には、『方輿輓』または「有持氏」としておびたしい数の引用がなされている。

これらの引用を調査することにより、彌性園蔵書と『彌性園方函』引用との関係を確認することはもとより、当時の彌性園周辺の医家との交流や、『彌性園方函』形成の過程についていささか窺い知ることができるといえる。

本発表は、2015年度杏雨書屋研究奨励の成果の一部である。